センター通信第11号

令和4年度 揖斐郡教育研究総会アンケートより (総回答 319名)

11月27日の揖斐郡教育研究総会では、実践論文の発表、ご指導やご挨拶及び各校での教育研究総会の参加につきまして、多くの先生のご尽力をいただきました。ありがとうございました。

教育総会後、アンケートフォームを通じてご回答いただきました内容を、センター通信を通じて報告させていただきますとともに、次年度以降の取組に生かしてまいります。

- (1) 実践論文プレゼン発表①国語「伝え合う力を高める国語科学習の在り方~ 発達段階を踏まえた第2学年の国語科学習を中心に~」から学んだことやこれからの実践に生かしたいと思ったこと書いてください。
- 伝え合う力を高め合ううために、話型や姿勢にこだわるのは小学校ならではだと思いました。中 学でも、形にこだわる視点も大切にしたいと思いました。
- 児童の伝え合う力をはぐくむためには、伝え合う機会を学習活動の中で増やすだけでなく、伝え合う表現方法を豊かにするための学習活動も大切だということが分かり、実践に生かしたいと思った。また、互いの考えを大切にし合う学級の雰囲気づくりにも力を入れていきたいと思った。
- 根拠となる自分の考えをもち、対話的な活動として協働的な取組を仕組むことが言語活動への意欲を高めるとともに学ぶに向かう力を養うことにもつながっていくことがわかった。また、教科の横断的な学びが、日常生活における様々な場面でもつなげられるように、認め励ます活動を位置付けることの重要性を感じた。今後の教科指導において、より深い学びとしてAIなど機械にはできない人間力を育成できる指導を徹底していきたいと感じた。
- 対話活動の活発化の中に、ミラーリングの技法を使って自信をもたせたり相手の言わんとすることを確認させたりする方法は、とても有効だと感じた。小学2年生という発達段階でこのように自信をもたせることや思いをきちんと受け止めてもらえるということは、自信の育成のためにも素晴らしい方法であると思う。また、「ほめほめタイム」の活用でキーワードで意見を述べさせるなど、「話すって面白い」という思いを育てる意味で、非常に巧みだなと思った。ユニークな提案を聞く中で、自分もやってみたいとわくわくする思いがした。
- ノートをいかした活動では、吹き出しを用いて役割演技に近付けるなど、発達段階に応じた指導はやはり重要だと感じた。話型の指導は、英語科でのコミュニケーションストラテジーの指導と似ています。小さい頃から、教え、価値付け、繰り返し指導することで定着すると改めて気づかされました。国語・言語能力は全ての活動の土台です。教科の中での指導に加え、全ての教育活動の中で行う大切さに気付かされました。小学校低学年から素晴らしい実践をしていただいているおかげで、今の中学生がいます。ありがとうございます。
- 音楽科授業においても、ワークシートには自分の意見を書き、班交流でも自分の意見を話すことはできても、全体交流となると挙手することもできず、自分の意見を意欲的に広めることができない生徒が多くいます。私はタイムリーに価値付けようと、話す立ち位置や発言内容でよかった部分を取り上げ学級に広げたりしますが、これだけでは生徒の「発言したい」という意欲は高まりません。教科の枠を超えて、朝や帰りの会など、授業を飛び越えて様々な生活場面において、様々な方面からの価値付けが必要であると感じました。中学生という発達段階を一生懸命生き抜く生徒にとって、仲間の存在は本当に大きく、人との出会いや関わり合いはとても貴重で大切なものだと思います。それぞれの生徒が出会った仲間同士が認め合うことで、自己有用感を高めることができると思います。私も今後の教科指導や学級経営の中で、生徒同士が互いに高め合い認め合えるような仲間づくりに励み、生徒の発言したいという気持ちを引き出せる教師になりたいです。
- 自分の思いや考えを表現する力を育成することは、数学科でも必要なことだと思いました。今後の授業の中で、ノートのレイアウトや挿絵などを活用しながら、どこが自分の考えなのか視覚的に分かりやすいような工夫を行っていきたいと思います。また、対話活動の中で、常に根拠を明確にさせたり、指し示すようにしたりするなど、教員が一貫して指導をしていく必要性を感じました。私は対話表というものを初めて知りました。自分ができるようになったという実感を得るためにも有効な手段だと感じました。ありがとうございました。
- 教科の枠を超えた活動の重要性を再確認できました。他教科や日常生活と、教科の内容が関連すれば生徒の中で理解が深まる、興味が高まると思うので、意識的に実践したいです。また、発達段階は異なるが、自分のノートに仲間の意見を書き加えることで仲間を尊重し、自らの学びを深める、少しレベルの高い、苦手意識のある学習活動について繰り返し活動に取り組ませることで徐々にできるようになる、など、中学生にも当てはまることがあると感じたので、実践していきたいと感じました。

- (2) 実践論文プレゼン発表② 教育相談「できた!」経験を通して、意欲的に活動できる児童の育成~児童の自己肯定感を高める保健室登校支援の実践~ から学んだことやこれからの実践に生かしたいと思ったこと書いてください。
- 「できそうなこと」を目標設定し、できることから取り組むことで、「できた」という経験を多く積み重ねることができる。これは、スモールステップで取り組むことであり、その都度価値付けていくことで、確実に自己肯定感は高まり次への意欲も生まれると感じました。不登校児童生徒だけではなく、どの子の指導にも生かせると思います。取組カードを使うことで、自分のがんばりを可視化することも有効だと思います。実践された手立てや考え方は、認知行動療法と同じだと感じました。
- 教師側は個に応じた実態を把握し、ケース会議など共通理解を図りつつ、児童生徒は自分が目指す小目標をもって取り組んでいくことで、できることが増えることが自信になる活動を位置付ける必要性を感じた。段階的に関わる人を増やし、様々な人と関わることが人と接することへの困難さを改善することができる。研修など学校を離れる活動を通して、仲間とのつながりをつくる糸口になることを捉え、そのための手だてを関わっている様々の立場の人が意見を出し合い位置付けることは、子供の安心感につながっていることがよくわかる。教師と子供の信頼関係にもつながると感じた。また自己肯定感の高まりにもつながっていくこともわかり、活かしていきたいと思った。
- 本校にもたくさんの不登校生徒がいます。様々な実態や様相のある生徒なので、すべての生徒に同じ指導はできませんが、その子たちに、小さなステップを考え、歩ませ、できたことを多方面から認めほめていく、そして、自信をもたせ、活動を広げていくというところにとても共感できました。この考え方は、すべての教科、学級経営、活動においてもつながるところだと思います。やはり生徒は、できたことに自信をもち、できたことで、「他にもやってみよう」という気持ちになるのだと思います。難しいのは、その支援と計画だと感じました。そこに私たちのプロ意識が現れるのだと思います。生徒のためにできることを考えていきたいと思いました。
- 自己肯定感を上げることは本校でも課題です。不登校傾向の生徒にどこまで求めていくとよいのか、ストレスになり余計に学校から足が遠のいたら…と心配することもあります。先生の実践から「まずは安心感」が大事だと感じました。学校が生徒にとって安心できる場所であることが前提にあり、その上に自己肯定感があるのだと思います。そして、安心の中で褒めることが自己肯定感を上げることにつながると感じました。担任だけでなく、学年職員、養護教諭、保護者などの多くの大人が連携することの大事さも感じる実践発表でした。安心できる環境を整えること、その瞬間に褒めること、多くの大人と連携することを大事に、生徒の自己肯定感をあげていきたいと思いました。
- 今は、コロナ禍から人間関係も希薄になってきている。自分を表現できなかったり、自信がなかったり。そんな心の原因から、学級に入れない児童生徒も多くいることと思います。身近な大人である教師からのアドバイスや関わりがきっかけになり、心を開いているように感じました。「あなたのことを見ている」自分の存在を認めてもらい安心して過ごすことのできる環境こそが、自己有用感にも繋がると思いました。そんな穏やかな時間を過ごせる空間、時間が必要なのかもしれません。
- 保健室を中心とした不登校支援がどうあるべきなのかを学ぶことができました。特に、今後自分自身の支援に取り入れていきたいと思った点は、個々の状況に合った小さな目標を常に掲げて関わり合うことです。ミッションやチラシにより担任との関わりを増やすなど、保健室だけの世界にしないことも大切だと思いました。
- 全ての児童が安心できる環境を整えることは、全ての職員に必要です。保健室を安心の場として、 その子が生活をする中で、保健室を中心とした大人や学校の児童との関わりがその子の成長に大 きく関わると感じました。そのためには、多くの大人との連携は欠かせないと感じました。
- 活躍できる場を与えてあげることの大切さを学びました。多くの人と関わることは、自信や安心感を持たすことができるので、本校でも地域の方と関わることを増やしています。地域の方と薬草を育てたり、大運動会で自分たちが司会や準備や演技をして、見ていただいたりすることを通して、充実感や達成感を味わって、子どもたちの自己有用感や自己肯定感を上げています。だか

- ら、子どもが活躍できる場をどんどん与え、その都度価値付けを行っていきたいです。
- 「人生のうちの数年を保健室登校であっても大きな問題はない。けれど、、」という言葉が印象に残りました。学校がすべてではないけれど、学校で仲間と過ごすことの楽しさも味わわせたい。そのために「できた!」という経験を積み重ねることはとても大切なことだと、改めて感じました。保健室登校児に限らず、どの子にも自己肯定感を味わわせるきめ細やかな心配りをしていくことを大切にしてきたいです。

(3) 郡教育研究総会の各先生方の講話や実践論文の講評で大切だと思ったことや心に残ったことを書いてください。

- 具体的な発表でより分かりやすかったです。作った先生の労力を考えると、残業時間は大丈夫なのかと思いました。
- 実践を記録として残すこと、実践論文のテーマとして、今日的課題を取りあげること、仮説と実践の整合性や達成したという根拠を明らかにすることが大切だと感じた。
- 目の前の子どもの目に見えない気持ちやよくなりたいと願う心を見ること、子どもを大切にした 実践こそが教職員のよい研究であると強く感じた。
- 継続的、系統的な指導が必要だということや、教科を超えた横断的な学習の仕方で力を付けることができること。また、児童の思いや姿をしっかりこちらが把握することや、目標とする姿を明確にもって指導することが教師として大切である。
- 日々、指導向上に向けて努力しているつもりでも、経験年数が経ってくると、どこか力が抜けて しまうところがあります。今日の発表を聞いて、改めて日々学び続ける教師でありたい、自分も 頑張らねば!と思いました。
- 連続性のある指導・粘り強い指導・自信がつけられるような指導などを、発達段階を意識しながら行っていくことが大切だということが分かりました。学級に所属感を感じてもらえるような学級、教科指導をしていきたいと思います。近年求められている、ICT機器の活用は私自身の課題でもあるので、今後の研究で力を入れていきたいと思います。ありがとうございました。
- 教員側が生徒にどんな力をつけさせたいのか明確に考えをもつことが大切だと改めて学ぶことが できました。強い願いをもってこどもたちに関わっていきたいです。
- 教員間の情報共有、生徒が意見をもつ、そして表現できる授業の工夫、日々の授業研究と生徒理解が大切だと感じた。
- 児童の実態をふまえて、手立てを考えること。願う児童の姿をもち、様々なアプローチを試みて、よりよい姿を目指していく意欲的な姿を大事にしたいです。教育実践論文では自分もそうですが、エビデンスや何がどのように効果があったかが不明確になりやすいです。たくさんやったらできた、のようになってしまいがちです。論文を書くときに何がどのように効果があるのか、また、無かったのかを率直に書けるようにしたいと思いました。今後実践論文を書くときに気を付けていきたいです。
- 研修で学んだことを実践し、結果等をアウトプットすることは、児童生徒と同じく自分の学びを 深め定着させることに繋がると思いました。実践論文という形でなくとも、何らかの形でアウト ップとする事を自身の課題として取り入れていきたいと思いました。
- 多くの先生方の工夫や努力のおかげで、揖斐郡の児童生徒の成長につながっているのだということを、改めて実感することができました。現状に満足せず、自分自身の実践をさらに深めなくてはと思いました。
- 成果の大小といういよりは、子どもたちの成長を本気で考え工夫をし、どのような実践をした結果、どうなったのか、という過程が、今後仕事をする ue
- で参考になると思った。多くの方の尽力に支えられて開催される研究総会であるということをすべての先生方が少しでも理解して参加できるとよいと感じました。

(4) 次年度以降の教育研究総会のもちかたについてのご意見やアイディアがありましたら書いてください。

● 今年度のようにオンラインでの開催がよいと思います。移動時間が削減できるため、授業時間が

少しでも確保できます。また今年度と同様に、オンラインでの開催の継続。論文発表も教科面と 生徒指導面など学校が抱えている問題を取り上げて、教師が学ぶ場を位置付けていきたいと感じ ました。

- このように、聴衆からの感想をオンライン集計できる方法は非常に良いと感じた。今後もぜひ行えるとよいと思う。昨年度からオンライン開催となったが、実際に会員が一会場に集っての開催と何も見劣ることろがないと感じている。コロナ禍から脱した後もこの方法で行えるとよい。論文の被表彰者にとっては全体が集まった場での表彰がより嬉しいとは思うが、実践論文のプレゼンを聞くことはオンラインで少人数で視聴した方が集中して聞くことができるため、今後もオンラインでの開催が良いと思う。
- リモートでの研究会の参加は初めてだったのですが、とても分かりやすく良い形だと感じました。 さまざまな見方考え方を論文を通して知れるので、自分の実践にも試してみたい
- 実践論文を書いていただいた方とオンラインの会議で各分科会のような形で質問などできる場があると良いと思います。(優秀賞の方だけでなく佳作の方との交流)
- 「職員室に大型 TV を設置し、それを視聴しながら参加をしました。それぞれが自分の席について視聴します。自分の学校では全員が画面に集中してお話する先生方やプレゼンを見ながら真剣に会に参加し、学ぼうとする姿が見られ、総会とは関係ない仕事をしたりする姿はありませんでした。また管理職の先生方も総会の意義やプレゼンの発表の意味について事前に指導していただき、会の後には、実践論文を書かれた先生方や会の運営にかかわられた先生のご苦労について若い先生にもわかりやすく説明していただき、学校全体で教育総会を通して学ぶ姿が見られてよかったです。

<次年度の教育研究総会について>

アンケートの内容を受けた下記の内容を、今後、郡小中校長会・研修部長会・センター運営委員会・ 教育長会で検討して検討していきます。

- 揖斐郡教職員の資質及び指導力・授業力の向上、優れた実践論文の取組に学び合い、揖斐郡の教育の向上を図り、児童生徒の成長を図っていくという目的のもと教育研修総会を継続し、質的な向上や効率的な運営の両面から総会のあり方を工夫する。
- オンラインでの実施がよいという意見が多く、次年度もオンラインの形での実施を考えるが、表彰の仕方の工夫、会の内容の充実や工夫について等内容については改善していく。
- センターからのオンライン配信、各校での研究総会への参加という形になるのでどの学校でも、どの教職員も積極的に参加するよう郡全体で確認しながら研究総会を意義あるものにする。
- 実践論文の参加は自主的なものであるので実践論文に取り組む先生の意欲や主体性を尊重する。令和3年度と令和4年度と続けて実践論文を出された先生がみえたが、実際の授業でも子供たちと一緒に生き生きと授業を行い、そんな姿が論文の中にも現れていた。またプレゼンで発表された先生が過去発表された実践論文に学びながら発表される姿も見らえた。働き方改革の面にも配慮しながら、こうした情熱や意欲に揖斐郡の教師がお互いに学びあうことも大切にしていきたい。
- 研究総会の全体を貫く一貫性がさらに明確になるように研究総会のテーマを設定し、テーマを受けて研究総会の内容を設けるようにする。

今後各校に1冊ずつ実践論文集を配付するとともに、郡内すべての先生方に実践論文を見ていただけるようセンターホームページに実践論文ライブラリーを掲載します。それぞれの論文に目を通していただき、自分の指導力や資質の向上に生かしていただければ幸いです。実践論文を書かれた先生方の日々の実践を行いながら自分の指導の在り方を見つめ、取り組まれたご苦労、そうして書きあがった論文を1つ1つじっくりと時間をかけて読んでいただいた審査員の校長先生方、教育総会でプレゼン発表ご指導・ご挨拶いただいた先生方、各校でご指導にあたってくださった先生方、そうした尊い思いの上に1時間30分の教育研究総会は成り立っています。改善すべき点は改善しなが、らそうした尊い思いを大切にできる揖斐郡教育会の事業を工夫していきたいと思います。よろしくお願い致します。